

高山の文化を高めた人々

24

上田流尺八道を広めた

大平巻龍

新田巻洋

(幸雄)

へ行き、その広野の大自然を相手に尺八を吹いたと聞かされた。

戦後、国鉄(ＪＲ)に入社されたが、昇格試験には目も

くれず、ただ一途に尺八だけに精進し、昭和五十四年には日米親善ロサンゼルス公演にも参加された。

尺八の歴史は古く、西暦五九〇年頃には、聖徳太子も好んで尺八を吹奏されたとある。古代の尺八は、朝廷の雅楽などに専用され、一般のものではなかった。しかし、尺八の音があまりにも高いというので、いつしか雅楽から除外され廃絶となった。



その後、法燈を受け継いだ普化和尚が普化宗をひろめ、その後、法燈国師の号を賜った僧が明暗流尺八を開祖した。明治四年に普化宗は廃宗となり、そのお蔭で民間に法器が楽器として進出し、黒沢琴古が初代琴古流を始め、琴や三弦との合奏が流行してきた。

合奏曲には、地唄(例 六段の調)、新曲(例 春の海)などがあるが、その頃の尺八奏者は、大半が琴古流で地唄一本

であった。それに対し大平師は昭和二十六年に長瀬会館(上二之町)で「こまどりバレエ」との共演や合唱団と共演するなど、次々と新曲を取り入れ、当時としては斬新な活躍をされた。

昭和五十六年七月一日、名古屋において「時鳥の曲」の尺八演奏中に倒れ、六十三歳で帰らぬ人となった。

曲を吹くのが尺八で心を吹くのが尺八道芸たりて道たらず